

Wh-疑問文、否定対極表現の「しか」、と also の「も」

長谷川 信子
東京都立大学

0. はじめに

wh-疑問詞、否定対極表現の「しか」、alsoの意味を持つ「も」の例文を(1)に示したが、これらは意味解釈的には各々作用域を持ち、その作用域は、疑問詞の場合は文末の「か」に、「しか」の場合は「ない」により規定され、「も」の場合は文全体にかかると思われる。

- (1) a. 花子は どの本を 買いましたか
b. 花子は その本しか 買わなかった
c. 花子は その本も 買った

本論文では、こうした作用域をとる要素とその作用域標示（「か」や「ない」など）との統語・意味関係を、機能範疇の主要部と指定部の一致現象として捉え、一致照合のための移動に関わる統語的制約を経済性の観点から検証する。第1節ではSaito (1992), Takahashi (1993)の分析とFukui (1993)の提案を出発点にwh-疑問文を考察し、Scramblingと思われる移動もwh-移動と分析されなければならない場合があること、そう分析するためには経済性の原理の1つの規準である<最少操作 (Fewest Steps)>をS構造（またはSpell-Out）からLFへの移動に対してのみ適応する必要のあることを論じる。第2節では「しか」と「も」についてもwh-句と同様の分析が可能であることを示し、これら3つの要素に関わる統語構造を提示する。第3節では、これらの要素が複数共起した場合にみられる、Tanaka (1993, 1994)が<線状交差条件 (Linear Crossing Constraint)>違反と捉えた現象を扱い、これも経済性の原理<最短距離 (Relativized Minimality)>がS構造からLFのみの移動に関わるとすれば説明できることを示す。第4節ではまとめを提示し、この論文で提案された分析の理論上の課題について考察する。

1. Wh-疑問文と派生の経済性

wh-句はその作用域標示 (scope marker, 以下SMと略す) を担う「か」(または「の」¹⁾を伴うことが必要で、(1a)から「か」を削除すると非文になる(*花子がどの本を買いました)。しかし、(2d)が示すように、単純にSMが存在するだけでは文法性は保証できず、特定の位置関係 (SMがwh-疑問詞をc統御する関係) になくならない(cf. Harada (1972))。

- (2) a. 花子が 誰に [太郎が その本を 買ったと] 言ったの

- b. 花子が 次郎に [太郎が どの本を 買ったか] たずねた
c. 花子が 次郎に [太郎が どの本を 買ったと] 言ったの
d. *花子が 誰に [太郎が その本を 買ったか] たずねた

この制限をここでは最近の理論の枠組み (Chomsky (1991, 1993), Chomsky and Lasnik (1993), Pollock (1989)など) を踏まえ、次のように説明する。疑問文のSMはCompの主要部 (head)であり、wh-句は(3)のような条件 (またはフィルター) をLFで満たすためにその指定部 (Spec)へ移動しなければならない。²

- (3) wh-句はそのSMのComp ([+wh]のComp) の指定部へ移動しなくてはならない。

wh-句はこの移動をすることにより、意味解釈上不可欠な演算子=変項 (Operator-Variable) 関係を作り出す。また、この移動で生じる痕跡は(4)の適正束縛条件を満たさなくてはならない。

- (4) 適正束縛条件 (Proper Binding Condition)

痕跡 (trace) は束縛 (照応関係にある要素によりc統御) されていなくてはならない。

そして、この(4)が、(2)に見られる文法性の差を説明する。文法的な(2a-c)では、wh-句がそのSMのあるCompの指定部へ移動した場合、そこに残る痕跡は(4)を満たす。しかし、非文の(2d)においては、wh-句の「誰に」は主文の要素なので、それが「か」のある補文のCompの主要部に移動した場合、その痕跡が(4)に違反することになってしまうのである。この(4)に従えば、wh-句はS構造においてそのSMに常にc統御されてなくてはならないかという点必ずしもそうではない。Saito (1992)は(5)のような文を扱っている。

- (5)a. 正夫が [花子が どの本を 図書館から 借り出したか] 知りたがっている
b. ?どの本を_i [正夫が [花子が _{ti} 図書館から 借り出したか] 知りたがっている]

(5b)は基本語順の(5a)にScramblingを適用し、補文のwh-句「どの本を」を文頭へ移動させた文であるが、その結果wh-句は、S構造ではそのSM (補文のComp) にc統御されなくなってしまう。それにもかかわらず、その文法性は(2d)とは比較にならないほど高い。(2d)は(4)に違反することは上で述べた。しかし、ここで注意したいのは、(5b)は(5a)同様に解釈され、そのLF標示は(6)になることである。

- (6) 正夫が [CP どの本を_i [IP 花子が _{ti} 借り出した] か_i] 知りたがっている]

そして、(6)は(4)には違反していないのである。すなわち、(5b)が(5a)同様(6)のLF構造に導かれさえしたら(4)違反にはならず文法性の説明が付くのである。では、(6)はどのように導かれるのであろうか。まず(5a)から(6)を導く場合から考えてみよう。これは、「どの本を」をLFでwh-移動により「か」のCompの指定部に移動させれば済む。この移動

は(3)も(4)も問題なく満足させている。次に(5b)であるが、これには少なくとも(7)に示した2通りの方法が考えられる。(i)のように一旦Scramblingをundoして元の位置へ戻し(すなわち(5a)にして)それにwh-移動を適用する方法、(ii)のようにScrambleした位置から直接wh-移動により補文のCompの指定部へ移動する方法の2つである。

- (7)(i) -- [正夫が_{CP} どの本を_i [IP 花子が_{ti} 借り出した] か_i] 知りたがっている]
- (ii) -- [正夫が_{CP} どの本を_i [IP 花子が_{ti} 借り出した] か_i] 知りたがっている]

いずれの方法でも(i)ではScramblingをundoするときに、(ii)ではwh-移動時に)下降移動を含むので、Scrambleした文頭の位置(--で示した位置)に痕跡が残れば当然(4)の違反となる。しかし、統語的にも意味解釈的にもその位置に痕跡を残す必要はない。Scrambleした文頭の位置は項の位置ではないので θ 理論には無関係である。また、wh-句に束縛される変項としての役割は項の位置にある痕跡が担うので、その位置が演算子=項(Operator-Variable)関係を担うこともない。このような意味解釈上無用な痕跡は残る必要がないのであり、結果として(4)違反は免れるのである。

それでは、(7)で示した(i)(ii)の2通りのLF操作はどちらも許されるものなのだろうか。Saito (1992)はさらに(8)の例文を示し、LFでのwh-移動はScramblingをundoした構造に適用される必要があることを論じ(9)を提案)、(7-i)のような派生を支持している。

- (8) a. 正夫が [みんなが [花子が どの本を 図書館から 借り出したと]
思っているか] 知りたがっている
- b. ??[花子が どの本を 図書館から 借り出したと]_i [正夫が [みんなが _{ti}
思っているか] 知りたがっている]

- (9) A constituent moved by scrambling can move back to its D-structure position in the LF component. (Saito's (39))

(8a)は入れ子式に文を2つ埋め込んだものであるが、一番深く埋め込まれた文の中にwh-句があり、それはもう1つ上の埋め込み文を作用域としている。この一番下の文をScramblingにより文頭に移動したのが(8b)である。この文に(7)で示した(i)(ii)の方法でLFを導びいた場合を考えてみよう。(i)のようにScramblingをundoさせた場合は(8a)を一時的に作り出し、それからwh-移動を適用するので何の問題も起こらない。しかし、(ii)の方法のように直接wh-移動を適用し「どの本を」を間接疑問文のCompの指定部に移動すると(10)のようなLFが生じ、その痕跡(_{ti})が(4)違反となる。

- (10) [... _{ti} ...]_i [... [[wh_j] [... _{ti} ...] か] ...]

(10)は(7-ii)の場合と違い、wh-移動する「どの本を」はそれ自体がScrambleしたわけではないので、 θ 理論上もOperatorに関わる変項としても、文頭に出ている補文の中に痕跡を残さねばならない。しかし、その痕跡は補文中にあるため、移動先のCompの指定部から

はc統御されず、(4)違反となってしまう。それにもかかわらず(8b)が基本的には文法的なことだから、(8b)のLF標示の派生には(i)のようなやり方が採用されている(すなわち(9))というのがSaito (1992)の主張である。しかし、このSaitoの主張は、(4)違反の生じない(5b)に対しても(7-ii)のような直接wh-移動を適用する方法を禁じているわけではない。(5b)の派生の曖昧性(7-i)(7-ii)は依然として残るのである。

派生の曖昧性に関してChomsky (1992, 1993)で提唱された極小主義(Minimalist Program)では、「派生の経済性」に照らし合わせて等価である時にしか許されないとしている。その主旨は、移動は最短距離でかつ最少の操作でなされるとするものであるが、それを文字どおりに解釈すれば(7-i)と(7-ii)は明らかに操作数において違いがあることになる。(i)はScramblingのundoingとwh-移動の2つの操作を必要とし、wh-移動だけが必要な(ii)よりもコストが高いことになる。(7i)と(7ii)のみの対比に経済性が関わるのならこれで派生の曖昧性は解消するのだが、それ以前に問題となることがある。つまり、そもそも(5a)が存在するのになぜ(5b)が許されるのかということである。(5a)も(5b)も最終的には(6)のようなLF標示を持つわけだが、(5a)からならwh-移動だけで済むのに、(5b)は(7)のどちらの派生を採用しても、Scramblingの適用があるという点で(5a)よりコストが高くなってしまふのである。

こうした問題の解決にFukui (1993)は(11)を提案している。

- (11) The Parameter Value Preservation (PVP) Measure

A grammatical operation (Move α , in particular) that creates a structure that is inconsistent with the value of a given parameter in a language is costly in the language, whereas one that produces a structure consistent with the parameter value is costless.

すなわち、日本語のような主要部後置言語ではScramblingのような左への移動はコストがかからないとするのである。この仮説の下では、Scramblingの適用を受けた(5b)もその適用を受けていない(5a)も同様のコストということになり、それらのLF標示である(6)は各々のS構造から1度の操作(wh-移動)だけで導くことができることになる。しかし、(11)を厳密に考えると、問題の解決はそれ程簡単ではない。たとえ、(5a)と(5b)がS構造までの派生で等価であっても、LFにおける操作でやはり差が出てくる。(5a)から(6)への派生は左への移動が関わるのでコストはかからないが、(5b)から(6)への派生では(7)のいずれの派生でも右への移動が関わるのでコストがかかることになり、(5b)自体がやはり許されなくなってしまふ。

この問題はFukuiの論文では検討されていないが、彼が(11)を提案したそもそもの動機は適用が随意的なScramblingをコストのかからない操作と主張することにあると思われるので、(ii)のPVPは字義どおりではなく、(12a)または(12b)のような解釈を許すよう改めると仮定して論を進めてみよう。

- (12) a. 主要部と指定部間の一致を伴わない随意的な移動であるScramblingはそのundo操作も含めてコストがかからない。しかし、wh-移動のような一致を伴う操作は方向に関わらずコストがかかる

b. 規則の随意性に関わらずS構造までの移動が左方向なら日本語ではコストがかからないが、LF移動は方向に関わらずコストがかかる。

(12a)によれば(5b)は(7)のいずれの派生でも(5a)と同様のコストで(6)を導くことになる。また、(12b)では、(7-ii)のLFでのScramblingのundoingが余計な操作となり、(7-i)しか許されないこととなる。おそらくFukuiの主旨は(12a)に近いものと思われるが、S構造におけるwh-移動現象をさらに考慮するとこのどちらの解釈でも十分ではないことがわかる。

上記の種々のwh-疑問文の例文で分かるように、日本語ではwh-句はS構造でCompの主要部に移動している必要はない。また、文頭にwh-句が移動している場合でも、それはScramblingによって移動したと考えると、wh-移動は日本語ではLFでしか適用されないとすることができそうである。ちなみに、極小主義では<先延ばし(Procrastination)>を派生の経済性の1規準として組み込んでおり、PFに影響を与えるS構造までの移動の方がLFでの移動に比べコストが高いとされており、この観点からもこの主張は歓迎できるものと言える(しかし、第4節参照)。

しかし、Takahashi (1993)は(13)の例文を示し、日本語にはS構造におけるwh-移動があると論じている。

- (13) a. Johnは [Maryが 何を 食べたか] 知りたがっているの
 b. 何を i [Johnは [Maryが ti 食べたか] 知りたがっているの]

(13a)のwh-句は、LFで項の位置から[+wh]のCompの指定部にwh-移動するが、補文も主文も[+wh]のCompを持っているので「何を」はそのどちらにでも移動できることになり、SMの作用域の取り方に曖昧性が見られる。一方、(13b)では、wh-句が既にS構造で文頭に移動しているのだが、ここで注目したいのはこの文には(13a)のような曖昧性はなく、主文の疑問詞疑問文としか解釈できないことである。即ち、文頭の「何を」は主文のCompと結びつき、補文のCompの指定部へは移動できないのである。この解釈の違いに注目し、Takahashiは(14)の一般化を述べ、それをEpstein (1992)にならい経済性の<最少操作>(15)から導くことを論じている。

- (14) A'-movement of a Wh-phrase to the initial position of a clause headed by [+wh] COMP counts as Wh-movement in Japanese. (Takahashi's (10))

- (15) Satisfy filters by using the fewest possible applications of Affect α .
 (Takahashi's (35), cf. Epstein (1992))

ここでのフィルターとは(3)のことで、比較される派生は(16)の3通りが考えられる。

- (16) (i) [CP_[Spec] [IP wh_i [IP ... [CP [IP ... t_i ...]Q] ...]Q]

- (ii) [CP_[Spec] [IP wh_i [IP ... [CP [IP ... t_i ...]Q] ...]Q]
- (iii) [CP_[Spec] wh_i] [IP ... [CP [IP ... t_i ...]Q] ...]Q]

(16-i)(16-ii)は各々(7-i)(7-ii)に対応し、S構造におけるwh-句の文頭への移動をScramblingとみなし、(16-i)はScramblingがundoされ一旦(13a)と同様の構文となってからLFでwh-移動する派生、(16-ii)はScrambleした文頭の位置(Saito (1985)に従いIPへ付加した位置)から直接wh-移動で[+wh]のCompの指定部へ移動する派生を示している。これらの派生の問題点は、点線で示した補文のCompの指定部への移動を禁じなくてはならないことである。Takahashiは、(13b)にもう1つ別の(16-iii)の派生を仮定することで、それらの点線の移動だけでなく(16-i)(16-ii)そのものの派生を排除できると主張する。すなわち、wh-句の文頭への移動はS構造におけるwh-移動と考えれば、LFでの操作が不要になり、(16-iii)より操作数の多い(16-i)(16-ii)は(15)により排除されるというわけである。

(16)の3つの派生に関する限りこれで問題は解決するのだが、Takahashiでは扱われていない(5b)で提示された問題も同時に考慮すると(15)における'fewest'の定義をFukuiの(11)(その解釈に関する(12))との関わりで再検討する必要が出てくる。Takahashiにとっては、(13a)と(13b)は、適用するレベルこそ違え、ともにwh-移動のみを要求するという点で経済性は等価と考えることになるだろう。Fukuiの(11)に従うとこのwh-移動は左方への移動なのでコストがかからないとも考えられる。しかし、左方移動だけを無コストとする考え方には問題があることは既に述べた。その問題点の改訂を狙って、(12a)(12b)の解釈を提示したのだが、そのいずれも上記の問題全てを解決する訳にはいかないだろう。

(12a)は、「一致」を介在とする移動は方向に関わらずコストがかかるとするものであるが、これは(13a)と(16-iii)の派生による(13b)を等価とするだけでなく、点線の下降移動も含めた(16-i)(16-ii)も等価としてしまい、(13b)に補文の疑問詞疑問文としての読みのないことの説明がつかない。また、(12b)はS構造移動の方がLF移動より経済的であるという提案だが、LFwh-移動を必要とする(13a)の方がS構造でwh-移動が適用した(16-iii)よりコストがかかる計算になりやはり問題がある。要するに、派生の経済性を単純にScrambling(およびそのundoing)や移動の方向性、適用レベルのコストから計算しても解決できないのである。明かな一般化は、Takahashiの(14)のようなもので、「S構造における表示が曖昧な場合は、(3)のようなLF条件をその時点で満足させている表示が経済的な派生となる」ということであろう。それは言い替えば、S構造からLFに至る操作の数が少ない方がコストが低いということである。そして、その比較対象となるのはS構造における構造的曖昧性を持つ構文に対してであり、音韻的に全く違う文(例えば(5a)と(5b)、(6a)と(6b)、(13a)と(13b)、のようにScramblingが適用していない文と適用している文)の共存は許され、お互いを経済性を競う対象とはみなしていないのである。この一般化は、<最少操作>を統語派生全般ではなくS構造からLFへの派生に限定することで捉えられると思われる。ここでは、(15)を(17)として言い替えておく。

- (17) 最少操作の原則

S構造からLFへの派生において、操作数の少ない派生は操作数の多い派生を排除する。

いささか記述的だが、(17)は具体的には少なくとも次の2つの場合に当てはまる。

- (18) (A) 1つのS構造が最終LF表示に至る派生に曖昧性のある場合。
(B) 音韻羅列が同一な2つのS構造が存在する場合。

(A)の場合は、例えば(5b)の派生で(7-i)と(7-ii)を比較し、操作数の少ない(7-ii)を選ぶというものである。ちなみに、Scramblingのかかっている(5a)は(5b)とは音韻上も異なつたS構造なので比較の対象にはならない。(B)の場合は例えば(16-iii)と(16-i/ii)を比較し、操作数の少ない(16-iii)を選ぶということである。(B)はさらに、文頭にwh-要素がある場合は、その位置が基本語順のまま(例えば主語)だとしても、それは既にS構造でCompの指定部に移動していると分析することを要求する。そのほうが、主語からCompへ音韻的に影響を与えない(phonologically vacuous)wh-移動をLFで適用するよりLF操作が不要になる分コストがかからないからである。

この節ではwh-移動現象を通して、(17)をS構造からLFに限定させるという結論を導いたが、次節では「しか」と「も」の作用域の現象もこの結論を支持することを示し、第3節では、これらの現象の関わり合いを検討する。経済性の原理におけるこの主張の位置づけは第4節で扱うことにする。

2. 他のA'-移動現象: 「しか」と「も」

例文(1b)で見たように「しか」は否定辞の「ない」と共起する。「しか」と「ない」の関係は、第1節で検証したwh-句とSMの「か」の関係と同じで、「ない」がない場合の(19a)や「ない」が「しか」をc統御できない場合の(19b)は非文となる。

- (19) a. *花子が その本しか 読んだ
b. *花子しか [太郎が その本を 読まなかった] 言った

この共起に関する制約を、ここでは疑問文の場合の(3)にならって、(20)のLF条件として提示しておく。(注2参照)

(20) 「しか」の句はそのSMである否定辞(Neg)の指定部へ移動しなくてはならない。

sika-移動もLFでOperator-Variable関係を作り出す典型的なA'-移動であると考え、(19)の非文法性はwh-句の場合の(2d)と同様に説明が付く。³すなわち、sika-移動によって残された痕跡が(4)の道正束縛違反になるのである。

「しか」とwh-句の共通点はさらに、(5)(13)の現象が観察できることにもみられる。(21b)はwh-疑問文の(5b)に対応し、Scramblingにより「しか」がそのSMである「ない」を含む補文を越えて主文の文頭に出されている文であるが、(5b)と同じく文法的である。

- (21) a. 花子が [太郎が その本しか 読まなかった] 思っている
b. ?その本しか_i [花子が [太郎が _{ti} 読まなかった] 思っている]
(cf. Hasegawa (1985), Kato (1988), Tanaka (1993))

(21b)のLFへの派生に関しては、(5b)の場合に(7)で示したと同様に、Scramblingをundoするか((i)のやり方)、(21b)にそのままsika-移動を適用するか((ii)のやり方)が考えられるが、前節の結論に従えば、(17)の経済性原理((18-A)の場合)が働いており、(5b)同様(21b)も(ii)の方法で派生されることとなる。

次に、wh-疑問文の(13)に対応する「しか」の現象だが、その前に、「しか」と「ない」の関係には、wh-句と「か」にはない制約があることに触れておかねばならない。wh-句は(2c)((22a)として復元)で見たように、補文中にありながら主文のCompの「か」と結びつくことができる。しかし、「しか」は(22b)が示すように、補文中からは主文の「ない」と結びつくことはできない(cf. Aoyagi and Ishii (1993), Kato (1985), Muraki (1978), Takahashi (1990), etc.).

- (22) a. (=2c) 花子が 次郎に [太郎が どの本を 買った] 言ったの
b. *花子が [太郎が その本しか 読んだ] 思っていない

しかし、「しか」の句が音韻的に補文の文頭にくるような文(i.e., 主語がPROで目的語に「しか」がある場合)では主文の「ない」をSMにとることができる。たとえば、(23b)のような例文が許され、これは補文の「ない」をSMにとる(23a)とはその作用域において明確な違いを示している。⁴

- (23) a. 花子が 太郎に [PRO その本しか 読まないように] 言った
b. 花子が 太郎に [PRO その本しか 読むように] 言わなかった

すなわち、花子の太郎への言いつけは、(23a)では「その本だけを読み他の本は読むな」ということだが、(23b)では「その本を読むこと」だけで他の本を読んでも一向に差し支えない。

こうした補文の主語がPROである構文を用いれば、疑問文の(13a/b)に対応するような文が得られる。

- (24) a. 花子が 太郎に [PRO その本しか 読まないように] 言わなかった
b. その本しか_i [花子が 太郎に [PRO _{ti} 読まないように] 言わなかった]
(Hasegawa (1985))

(24a)はSMが補文にも主文にもあり、「ない」の作用域は曖昧である。「しか」の作用域が補文の場合は(i)「その本だけを読んで他の本は読むな」という命令はしなかった」という意味であり、主文を作用域とする場合は(ii)「読むことを禁じたのはその本に関してだけ」という意味になる。この事実は、wh-疑問文の(13a)でwh-句の作用域が補文と主文で曖昧であるのと同様の現象である。一方、「しか」が文頭に移動している(24b)では

(24a)のような曖昧性はみられない。「しか」が主文の「ない」と結びつく(ii)の解釈しか得られないのである。これも、wh-疑問文の(13b)で、文頭に移動したwh-句が主文の作用域しかとれない事実と同じ現象と考えられ、S構造での文頭への移動は単なるScramblingではなく、「ない」の主要部へのsika-移動として分析されるべき(すなわち、(18-B)の場合)であることを示している。⁵

(13)や(24)でみられた現象は、alsoの意味の「も」でも観察できる。

- (25) a. 花子が [太郎が その本も 読んだと] 言った
 b. その本も_i [花子が [太郎が _{ti} 読んだと] 言った

「も」には「しか」やwh-句が持つ「ない」や「か」のような作用域を示すSMは顕在していない。しかし、(25a)には(13a)(24a)と同様、作用域が補文をとるか主文をとるかで曖昧性がみられる。すなわち、「花子が言ったのは太郎がその本も読んだということである」という読み(補文が作用域)と「その本だけでなく他の本に関しても花子が太郎が読んだと言っている」という読み(主文が作用域)が存在するのである。⁶ それに比べ、「も」の句が文頭に移動した(25b)では主文を作用域にすることしかできず、(13b)(24b)と同様の現象を示している。この平行的事実を統一的に記述するには、「も」にも抽象的なSMが存在し、「も」の句はLFでその指定部へ移動すると分析するのが妥当だろう。すなわち、wh-句に対する(3)や「しか」に対する(20)のように、「も」にも(26)のようなLF条件を仮定し、(25)の事実に対しては(17)/(18-B)により、(13)(24)と同様の説明を行うのである。

(26) 「も」の句はそのSMであるPolの指定部へ移動しなくてはならない。

「も」に対応する機能範疇をここでは便宜的にCulicover (1991)の用語を借りてPolarity Phrase (PolP)としたが、それ以上の意味はない。現代日本語では「も」のSMとなる機能範疇を具体的な語彙で指摘することはできないが、古文では「も」が終止形を結びにとる<係り結び>を形成していたことから、述語の語尾にそうした範疇を仮定することが通時的に理由付けられる。

さらに、Hasegawa (1991)が扱った(27)(28)の言語事実を考慮すると、PolPの存在と(26)のLF条件は「も」の統語記述の上からも望ましいことが分かる。

- (27) a. 花子もその本を読んだ (28) a. 花子がその本も読んだ
 b. 花子もその本を読まなかった b. 花子がその本も読まなかった

(25)でも観察したが、「も」の意味的機能というのは、「も」がない場合の文が意味することに加え、もう1つそれと平行する文を含意させることである。⁷ 例えば、(27a)の文は「花子がその本を読んだ」だけでなく「花子以外の誰かがその本を読んだ」ことを含んでいる。また、「も」が否定辞と共に起している(b)の場合、例えば(27b)は、「花子がその本を読まなかった」と同時に「花子以外にその本を読まなかった人が最低1人存在する」とことを含意している。これは、「も」の句が否定辞の「ない」の上の作用域をとる読

み(Also-Notの読み)である。ここで注目したいのは(27b)には「ない」が「も」の上の作用域をとる読み(Not-Alsoの読み)、即ち「誰かがその本を読んだのだが、花子も読んだというわけではない」という読みがないことである。この事実から、Hasegawa (1991)は「も」を肯定対極表現の1つとして扱い、「も」は否定辞の下の作用域はとれないという生起条件を提案した。しかしそれは事実の記述にすぎず、なぜ「も」がそういう条件に従うのかに対する本質的な説明ではない。しかし、ここで提案した(26)を仮定し、かつPolPがNegPより上の構造をとると考えれば、「も」は当然否定の上の作用域しか取れないことになり、わざわざ肯定対極表現と規定する必要はなくなるのである。また、PolPがNegPの上の構造をとること自体は、「ない」は活用をもつ述語で「も」は古文において活用語尾の終止形を<結び>としていたことを考えれば妥当なことであろう。

上記の議論で重要な役割を果たしたのは、(13b)(24b)(25b)の例文で、これらが特に興味深いのは、補文の文頭に移動したwh-句、「しか」、「も」を伴う補文の要素が主文の作用域しか取れないという事実である。この事実は、日本語にS構造におけるwh-移動、sika-移動、mo-移動のようなA'-移動が存在していることを示し、それは派生に(17)/(18)の経済性がS構造からLFの派生に関わっているとすることで説明できたのである。これらのA'-移動は、wh-句、「しか」の句、「も」の句を各々Comp、Neg、Polの指定部へ移動させるのだが、こうした機能範疇の構造上の関係に関しては、PolPがNegPの上にあることが示された。また、CompとPolの位置関係は、Compの主要部の「か」が活用を持つ述語のさらに右にくることからCompPがPolPの上にあると予想される。そして実際、それを裏付ける事実も存在する。

(29)は前節の(8)で扱ったSaitoの例文の一番深く埋め込まれた補文に「も」を付けた文である。

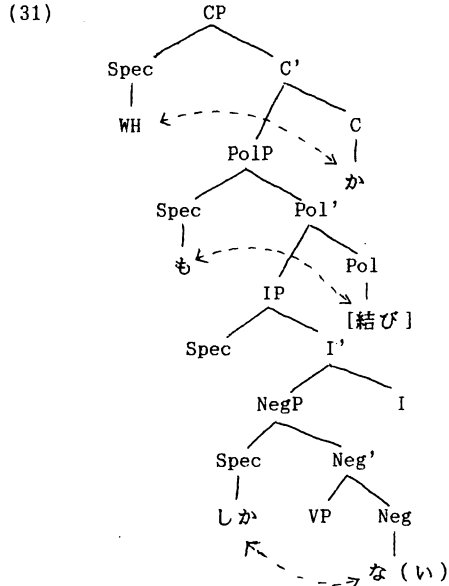
- (29) a. 正夫が [みんなが [花子が どの本を 図書館から 借り出したと] も
 思っているか] 知りたがっている
 b. *[花子が どの本を 図書館から 借り出したと]も_i [正夫が [みんなが _{ti}
 思っているか] 知りたがっている]

基本語順を持つ(29a)の文法性には問題はないだろう。しかし、「も」の付いた補文を文頭に出した(29b)は非文である。これは(8b)が文法的であるのとは対照的である。Saitoは(8b)の文法性を(9)を仮定することにより説明したのであった。もし、(29b)でみられる補文の文頭への移動がScramblingによるのなら、(29b)は(8b)同様(9)に従い元の位置に戻り、そこからwh-移動が適用されることになり、(29b)の非文法性は説明できない。逆に言えば、(29b)が非文であることは、この補文が元に戻ることを示している。実際、上記で示した分析は、それを予測するのである。(29b)で文頭に移動している補文は「も」を伴っているので、この移動は経済性(17)/(18-B)によりmo-移動となる筈である。LFでの一致照合のための移動は(9)の対象とはならず、元に戻ることはできない。そのため、wh-句「どの本を」が「か」の指定部にLFでwh-移動すると、その痕跡が(4)の適正束縛違反を引き起こしてしまい非文となるのである。この分析を踏まえ、さらに、(30)を検討すると、CompとPolの構造関係が決定できる。

- (30) a. 正夫が [花子が どの本を 図書館から 借り出したと] も 思っているの
 b. [花子が どの本を 図書館から 借り出したと]_i [正夫が ti 思っているの]

(30b)で文頭に移動している「も」の補文は、(29b)の「も」の補文同様元には戻れない。それにもかかわらず、(30b)は文法的であり、wh-句「どの本を」は適正に解釈されている。このことは、文頭の「も」の句からwh-句が移動して「か」のあるCompの指定部へ移動しても(4)違反を起こさないこと、すなわち、Polの指定部内に残されたwh-句の痕跡はCompの指定部から束縛されていることを示しており、PolPはCompPより下に位置していなければならないという結論に達するのである。

以上の討議から、Comp、Pol、Negは(31)のような構造関係を持っていると考えられる。



これらのA'-範疇は点線で示した指定部と主要部間の一致照合を必要とする。この要請を上記ではこれら3つの要素にそれぞれ(3)(20)(26)という別々のものを設けて記述してきたが、ここではそれらを統合し(32)のように一般化させておく。(注2参照)

- (32) 「一致」を要求する要素 (wh-疑問詞、「しか」の句、「も」の句) はそれと一致する主要部の指定部へ移動し、主要部=指定部間で「一致照合」(Spec-Head Agreement checking)をしなくてはならない。

3. Wh-疑問詞、「しか」、「も」の相互関係

この節では、ここまでで提案されたwh-句、「しか」、「も」に関する分析を基に、これらが複数共起する時に観察される現象を考察し、その解明には別の経済性の規準<最短距離>がやはりS構造からLFへの派生に關与していることを論じる。

まずwh-句と「しか」の関係から見てみよう。(33)で見られるように、wh-句が「しか」に先行すれば文法的だが、「しか」が先行すると非文になる。⁸

- (33) a. 誰が その本しか 読まなかったの
 b. *花子しか どの本を 読まなかったの

Takahashi (1990)はこの文法性の対比を、Relativized Minimality (RM) (Rizzi (1990))を組み込んだECPにより説明する。すなわち、(33b)が非文になるのは、LFでのwh-移動がNegの指定部を越えるので、wh-句の痕跡が[-γ]となり非文となるというのである。それに対し(33a)は、wh-移動もsika-移動もお互いの指定部を越えることがないので、それらの痕跡は[+γ]となり文法的なのである。

一方、Tanaka (1993, 1994)は、(33)の現象はS構造における線状交差条件(Linear Crossing Constraint)によって解決されるべきであると論じる。すなわち、wh-句とそのSMのCompを結ぶ線と「しか」とそのSMの「ない」を結ぶ線が交差しなければ(nestingなら)(33a)のように文法的になり、(33b)のように交差(crossing)すると非文になるというのである。さらにTanakaは、(34)のような例文を観察し、線状交差条件はS構造にかかる条件だとしている。⁹

- (34) a. ?*その本しか_i 誰が ti 読まなかったの
 b. ?どの本を_i 花子しか ti 読まなかったの

(34)は(33)の語順を逆にしたものであるが、それに伴い文法性も逆転している。この対比は線状交差条件なら簡単に説明が付く。D構造がどうであれ、S構造でwh-句が「しか」に先行すればnestingになるし、「しか」が先行すればcrossingとなる。Tanakaはさらに(35)-(38)のようなより複雑な例文を用いて彼の結論を強調している。

- (35) a. Johnが [誰が LGBしか 読まないか] 知りたがっている
 b. *LGBしか_i [Johnが [誰が ti 読まないか] 知りたがっている

- (36) a. 花子しか [太郎が 何を 買ったか] 知らない
 b. *何を_i [花子しか [太郎が ti 買ったか] 知らない

- (37) a. *花子が [太郎しか 何を 買わなかったと] 言ったの

- b. ??何を_i [花子が [太郎しか_i ti 買わなかった] 言ったの]
- (38) a. *花子が [誰が その本しか_i 読むか] 知らない
- b. ??その本しか_i [花子が [誰が ti 読むか] 知らない]

S構造における交差が非文法性の理由であるというTanakaの結論は、以下の(39)-(41)の例文を考慮すると「しか」と「も」の関係、「も」とwh-句との関係にもあてはまるように思えるかもしれない。

- (39) a. 花子も その本しか 読まなかった
 b. ??その本しか_i 花子も ti 読まなかった
 c. *花子しか その本も 読まなかった
 d. ?その本も_i 花子しか ti 読まなかった
- (40) a. 誰が その本も 読んだの
 b. ??その本も_i 誰が ti 読んだの
 c. *花子も 何を 買ったの
 d. ?何を_i 花子も ti 買ったの

- (41) a. 誰が [太郎が その本も 買ったと] 言ったの
 b. *その本も_i [誰が [太郎が ti 買ったと] 言ったの]

すなわち、「も」と「しか」の場合は「も」が先行、wh-句と「も」の場合はwh-句が先行すると文法的な文が得られ、その逆の語順の時は非文となるのである。この事実にも、「も」にPolというSMを文末(Compの前、Negの後)に仮定し、「も」と文末を結ぶ線がwh-句=Compの線、または「しか」=「ない」の線と交差する時に非文、交差しない時に文法的になるという説明を与えることができる。¹⁰

しかし、交差の有無では説明のつかない現象があることに注意したい。

- (42) a. *花子しか [太郎が 何を 買ったと] 言わなかったの
 b. *[太郎が 何を 買ったと]_i [花子しか ti 言わなかったの]

(42a)の非文法性は線が交差しているとの理由で排除できるが、補文を文頭に移動した(42b)では、wh-句とそのSMの「の」を結ぶ線と「しか」と「ない」を結ぶ線は交差していない。それにもかかわらず(42b)は(42a)と同じく非文なのである。この(42)を線状交差条件に対する重要な反例と考え、以下ではTakahashi (1990)で試みられたRMによる分析を、第2節までの提案を踏まえてさらに発展させる方向で分析してみたい(注9参照)。

Tanakaのcrossing対nestingの一般化は(42)以外は事実を捉えているので、まずどういう構造条件の下でnestingまたはcrossingが起こるのかを検討してみよう。S構造におけるnesting構造というのは、(31)の構造の観点からは、より右側の(構造がより上の)SMと対応する要素がより左側にくる場合ということである。このことは、(31)の構造の指定部に入るべき要素がS構造で既に入っていれば必ずとnesting構造になることを意味する。言い替えると、(33)-(41)で文法的な文は、S構造で既に対応するSMの指定部へ移動しているから文法的なのであって、S構造でnestingになっているのはその結果にすぎないという見方ができるのである。ちなみに、第1節で提案したS構造からLFへの段階で<最少操作>の原則(17)が適用されるという見方はこの状況を作り出すことを保証している(これは(18-B)のケースにあたる)。たとえば(37b)で、文頭に出されたwh-句は、(17)によりS構造の時点でwh-移動によりCompの指定部に入っていることが要求される。またwh-句だけでなく「しか」の句も同様にLFでの移動を不要とするためにはS構造の時点でsika-移動が既に適用していることになる。すなわち、wh-句も「しか」も(31)の構造の指定部にS構造の段階で移動しておりLFでの操作は必要としないのである。そしてこのことが(37b)が文法的なことにつながっていると考えるのである。ここで注意したいことは、S構造でのwh-句「何を」の移動は、「しか」の指定部(「太郎しか」)を越えても問題がないということである。このことは、S構造でのA'-移動にはRMは関わっていないことを意味している。ここでは、RMを経済性の原則<最短距離>(43)として提出する。

(43) 最短距離の原則 (Relativized Minimality)¹¹

着地可能な位置(potential landing site)を越えて移動してはならない。

さて交差(crossing)を提示している非文であるが、(31)の構造の観点から見れば、それはどちらかのA'-要素が決められた指定部にS構造でまだ入ることができないような語順になっている時に起こるのである。そして、そのまだ入っていないA'-要素がLFで移動する時に他のA'-指定部を越えてしまうために非文となるのである。たとえば、(37a)では、wh-句の「何を」は主文のCompの指定部へ移動しなくてはならないが、その際に補文の「太郎しか」(これは(17)(18-B)によりS構造でNegの指定部に既に入っている)を越えることになる。そして、その動きが非文法性を引き起こすと考えられる。また、(35b)では、S構造で移動した「しか」は単なるScramblingで移動したのであり、LFにおいて補文のNegの指定部へ移動しなければならない。この場合の移動は下降移動だが、これは(18-A)の場合で、やはりsika-移動と考えられる。この移動の際に補文のCompの指定部(ここにはS構造の段階で「誰が」が入っているのだが)を越えることになり、問題が生じるのである。このように考えると、S構造の交差現象とみられたものは、S構造からLFの移動にかかわるRMという経済性の原理(43)により説明が付くことになる。

この(43)を用いた分析は、S構造における交差条件では説明の付かなかつた(42)によってさらに支持される。(42a)は交差を示している文だが、(43)によれば、この文の非文法性は「何を」がLFでwh-移動する際に、Negの指定部にある「花子しか」を越えるから排除されるということになる。(42b)では補文が文頭に移動しているのだが、これはScramblingで、Saitoの(9)に従いLFで元の位置に戻るということになる。すなわち、(42b)はLFでは(42a)と同様の構造になり同じように排除されてしまうのである。

また、交差による説明とは無関係と思われる(44)のような文も(43)なら分析が可能となり、ここで提案した分析のさらなるサポートになるとと思われる。

- (44) a. (cf. (35a)) Johnが [誰が どの本しか 読まなかったか] 知りたがっている
b. (cf. (35b)) どの本しか_i [Johnが [誰が _{ti} 読まなかったか] 知りたがっている
c. (cf. (34a)) どの本しか_i 誰が _{ti} 読まなかったの

(44)は(35)(34b)の「しか」の句の名詞をwh-句に変えたものである。上記の分析に従えば、(35b)(34b)の非文法性は、Scramblingで文頭に移動した「しか」の句がLFでsika-移動する際に、wh-句のあるCompの指定部を越えてしまうので(43)違反になるということである。同様のことが「しか」の句がwh-句を含む(44b)(44c)でも起こっているとすると、これらも非文法にならなくてはならない。しかし、(35b)(33b)と違って文法的である。なぜこれらが許されるのかと言えば、LFでの移動が2段階に分割され、着地可能地点を越えずに済むからだと思われる。すなわち、文頭の「どの本しか」はまずwh-句「どの本」の「一致」のためにCompの指定部へ立ち寄ることになる(だからこの動きはwh-移動)。その後、残された「しか」が「一致」のためにNegの指定部へと移動するのである。結果として、補文のCompの指定部を飛び越えることはなく(43)違反にはならないのである。¹²

4. まとめと課題

日本語は典型的な主要部後置言語で、述語の項も全ての指定部も主要部の左に位置する。また、日本語の移動は、Scrambling、格に関わるNP移動(cf. Miyagawa (1989))、この論文で扱ったwh-句、「しか」、「も」の関わるA'-移動も含め全て左方移動であり、D構造、S構造、LFのどのレベルでも述語の左側に全ての要素がくる。結果として、ある要素のS構造の位置というのは、それがD構造生成時の位置なのか、ScramblingによりIPへ付加された位置なのか、A'-指定部の位置なのか、etc. 単純に語順から判断することはできない。¹³ この論文ではこうしたS構造での曖昧性を、経済性((17)の<最少操作>)がS構造からLFへの派生にのみ関わりと仮定することで解消する必要があることをまず主張した。この主張は、ここに(45)として再現した(13b)(24b)(25b)で観察された事実、すなわち、文頭のA'-要素の作用域に曖昧性が見られないこと、により裏付けられたのである。

- (45) a. (13b) 何を_i [Johnは [Maryが _{ti} 食べたか] 知りたがっているの]
b. (24b) その本しか_i [花子が 太郎に [PRO _{ti} 読まないように] 言わなかった
c. (25b) その本も_i [花子が [太郎が _{ti} 読んだと] 言った

さらに、S構造におけるA'-要素間の<線状交差条件>違反と見られる現象も、この(17)の<最少操作>と共にもう1つの経済性の原理(43)<最短距離>がやはりS構造からLFへの派生に関わりと限定することで説明の付くことを示した。

この論文で支持した(17)(43)は、多少その規定の仕方は違っていても、基本的にはChomsky (1991, 1993)で提案された原理である。しかし、この論文が特に主張する点は、

それが統語全般に関わるのではなく、可視構造(PF)に影響を与えるS構造からLFへの派生においてのみ関わるという点である。そうすることによって、Fukui (1993)がPVP(11)で捉えようとしていた「Scramblingは経済性原理とは無関係」との一般化を取り込んだのである。この「経済性原理をS構造からLFへの派生に限定する」という提案は、単にScramblingを無コストにするという効果だけでなく、S構造に構造的曖昧性がある場合は、A'-要素がS構造で既に「一致」する指定部に移動している構造の方がより経済的な派生を約束するという帰結をもたらす。これは一見、経済性のもう1つの原則である<先延ばし(Procrastination)>と相反する方向のようにも思えるが、次のように考えれば、文法全体の整合性はある程度追求できるものと考ええる。

<先延ばし>の原則の根本にあるのは、PFに影響を与える移動はそうでない移動よりコストが高いという仮説である。すなわち、PFでの破綻(crash)が避けられるなら、LFでの照合に関わる移動はS構造ではなくLFで行う(規則の適用は<先延ばし>する)ことが好ましく(optimal)、経済的だと考えるわけである。英語のようなScramblingのない言語では、この<先延ばし>の原則は文字どおりに解釈されて問題はない。しかし、日本語にみられる、PFには影響を与えるが、経済性においてはコストのかからないScramblingのような規則はそもそも、<先延ばし>を含む経済性の原理とは矛盾しているのである。それでも、経済性が何らかの形で日本語にも関わっているとすれば、PFに影響を与えること自体はコストがかからないと考えるしかないだろう。すなわち、「経済性はS構造からLFへの派生にのみ関わり」という本論文の主張になるわけである。

この結論が正しいとすると、当然次の疑問は、英語のような言語にもこの主張は採用され得るか、そして、日本語、また、言語一般においてD構造またはD構造からS構造への派生とは一体どういう機能を持っているのかということである。その段階の操作が経済性に無関係であるとの本論文の主張の1つの帰結は、D構造と、そこからS構造に至る派生は文法理論上存在しなくても構わないということである。しかし、これを、Chomsky (1993)がD構造の存在には概念的必然性がないと述べていることに還元してしまえることなのかどうか現時点では定かではない。また、同時に、この主張は、音韻に現れる構造を基底生成するという、枠組みこそ遠い過去にも何度か提案されたいわゆる'base generation'の考え方(例えば、Brame (1978, 1979), Hasegawa (1981))に通じるものがあるとも言えるかもしれない。しかし、この方向性が再度極小主義においても検討に値するかどうかも含め、この論文の結論の理論的位置付けに関しては将来の研究課題としたい。

注

* 本論文はシンポジウムで発表した論文に加筆・訂正したものである。また、この論文はその1カ月後(1994年7月)東北大学での「日本語・英語・日英比較のワークショップ」でも発表する機会を得た。これらの会場の参加者からは多くの貴重なコメントをいただいた。また、両発表の前後に内堀朝子氏、浦啓之氏、牧秀樹氏、宮川繁氏とディスカッションする機会があり、大いに得るところがあった。ここに記して感謝したい。この論文はそもそも1986年にUniversity of California at IrvineでのcolloquiumとUSC-UCLA Japanese-Korean Linguistics Circleの月例会で発表したHasegawa (1985)を最近の極小主義の枠組みで検討し直したものののだが、そのきつ

かけになったのは田中秀和氏の1993年の東京地区言語学サークル(TACL)での発表とTanaka (1993, 1994), Takahashi (1990, 1993)の論文であった。これらの論文には負うところが大きい。最後になったが、この論文を発表する機会を与えて下さった阿部泰明氏、曾我松男氏、伴紀子氏はじめシンポジウム実行委員会の方々には深く感謝したい。

1. 厳密には(2a)(2c)などでみられる疑問文の文末の「の」は疑問文標示というより形式名詞で、その後にSMの「か」を含む「(の)ですか」が略されていると分析するのが妥当と思われるが、ここでは議論の簡素化のために「か」も「の」も疑問文のSMとしておく。
2. ここでは議論の簡便さから(3)を提示したが、これは独立した条件ではなく、ある要素とそのSMは一致素性を共有しており、その一致関係は主要部と指定部の構造関係を満たしたときのみ照合されると考えれば、文法における<一致照合(agreement checking)>の1つの例として捉えられる。第2節で提示される「しか」に対する(20)や「も」に対する(26)に関しても同様で、第2節ではそれら3つを(32)として統合するが、それ自体もより一般的な<一致照合>に包括されるべきものであることには変わりはない。
3. ここではA'-移動の定義には深く入らず、意味解釈的にOperator-Variableの関係を作り出す移動はA'-移動と考えておく。極小主義では従来のGB理論で採用していたD構造で項が起きるか否かという定義をやめ、L-relatednessという概念を軸に再定義しているが、このL-relatednessを使うと、「ない」のようにTenseの主要部と形態的に関わる要素はL-relatedとされ、その主要部はA-位置と規定されてしまう。Chomsky (1993)では、L-relatednessを使ってCompの指定部(A')とInfl関係の指定部(A)を区別しているが、Compの指定部だけでなくNegや後述するPolの指定部もA'の位置と考えることが望ましいとすると、この定義のあり方を検討する必要がある。この問題は今後の研究に委ねたい。
4. この論文では「しか」が主文の「ない」と対応できるときの条件に関しては「音韻的に補文の文頭」という記述をするに止め、その分析には立ち入らない(cf. Aoyagi and Ishii (1993), Kato (1985, 1988, 1991), McGloin (1976), Muraki (1978), Takahashi (1990), etc.)
5. 「しか」とwh-句との共通性はさらに、Saitoが(8)を使って(9)を導き出したと同様の議論を「しか」を用いた(i)でも展開できることにも見られる。
 - (i) a. 花子が [先生が 太郎に [PRO その本しか 読むように] 言わなかったと] 思っている
 - b. ??[PRO その本しか 読むように]i [花子が [先生が 太郎に ti 言わなかったと] 思っている]

6. (25a)において「も」が主文に作用域を持つ読みはかなり弱い。しかし、(25)の重要性は、(25b)が補文を作用域にとることができない(即ち、文頭の「も」の句が(9)の対象として補文内に戻るとは分析できない)ということで、この判断は明確であろう。この論文では「も」しか扱っていないが、牧秀樹氏(談話)によると、対照の「は」を使っても同様の事実が得られるという。また、Tanaka (1994)の「こそ」の討議も同様の事実を示している。後で触れるが、これらは全て古文においては<係り結び>を示す助詞で、その点からも似たような振る舞いをするのが予想される(cf. Kuroda (1965))。しかし、筆者にとっては、「は」「こそ」に関する判断は「も」の場合ほどははっきりとしたものではない。(注10参照)
7. 「も」の含意の記述とそれをどう統語から引き出すかに関してはKuroda (1965, 1969, 1970)、Hasegawa (1991)を参照。
8. wh-句と「しか」の共起制限に関しては、Aoyagi and Ishii (1993), Hasegawa (1985), Takahashi (1990), Tanaka (1993, 1994) などがある。
9. Maki (1994)もTakahashi (1990)に反論し、「しか」などの否定対極表現とWH-句の関係は交差現象として扱うべきだと論じている。Takahashiも(34b)のような文を扱っており、その文法性を次のように説明している。Wh-句のS構造での文頭への移動はScramblingで、その時点では「しか」はNegの指定部に移動している必要はないのでRM違反にならないというのである。ちなみに、この考え方は<最少操作>を仮定するTakahashi (1993)とも本論文の分析とも矛盾する。また、(34a)のような文は、Takahashi (1990)では扱っていないので、その非文性をどう説明するかは推測するしかないが、おそらく、文頭の「しか」は(34b)のwh-句と同じようにScramblingによってIP付加していると分析すると思われる。しかし、それでは、彼は付加位置はRMを引き起こさないというRizzi(1990)を踏襲しているので、LFでのwh-移動が[+γ]の痕跡を残すことになり、誤って文法的であるという判断することになるだろう。さらに、Takahashi (1990)の分析では、Tanakaが扱っている(35)-(38)のような埋め込み構造を持つ例文をどう扱うかは定かではない。しかし、以下で提案する分析はRMを使うので、その点では、Takahashiの分析を経済性の観点からの発展・見直ししたものと言えるかもしれない。一方、Hasegawa (1985)も(33)~(38)のような構文を検討し、数量子とSMの間に他の数量子やSMが介入することを禁じるという条件を提案している。
10. Tanaka (1993)は「こそ」を使ってwh-句と「しか」との関わりを考察している。注6でも述べたが、筆者には「こそ」の生起は「も」ほどには自由とは思えず、「も」の例文に対するほど明確な文法性の判断が得られない。Tanakaによると「こそ」はCompの上の機能範疇と一致するとしており、「こそ」がwh-句に先行すれば文法的だが、その逆の語順では非文となると論じている。

11. 何が「着地可能な位置」なのかに関しては統一的な見解は得られておらず、Chomsky (1991)のように指定部が関わる移動はA/A'-移動にかかわらず全ての指定部が着地可能点となるという考え方もある。ここでは、A'-移動に関してはA'-主要部の指定部だけがその着地可能な位置であるとの考え方を採用する。

12. (44)との関連で(i)も検討に値する。

- (i) a. (cf.(40a) *花子が [誰が どの本しか 読むか] 知らない
b. (cf.(40b) *どの本しか_i [花子が [誰が _i 読むか] 知らない

(i)は(44)と違って「しか」のSMは主文の「ない」なので、(ia)ではLFで、(ib)ではS構造で「どの本しか」が主文のNegの指定部へ移動しなくてはならない。しかし、同時に「しか」の句に含まれる「どの本」はwh-句であるから、補文のCompの指定部へ移動する必要がある。結果として、「しか」の句の内部にwh-句の痕跡が残ってしまい、その痕跡が移動先の補文のCompから束縛されることができないので、適正束縛条件(4)違反になるのである。

13. この論文では「格」が関わるA-移動は扱っていないが、Chomsky (1991, 1993), Chomsky and Lasnik (1993)に従い、格もAgrPの指定部で一致照合を受けるとすると、述語の左側の要素は、それが例えばwh-句であった場合、理論的にはD構造生成時のVP内の位置にあるのか、格照合を受けるAgrの指定部にあるのか、Scrambleされた位置にあるのか、それともwh-照合を受けるCompの指定部にあるのか決定できない。本文でも述べたが、この論文はそうした曖昧性を経済性の観点から解消する必要性のあることを論じ、少なくともA'-位置での一致照合が関わる要素に関しては(17)(18-B)により構造的に可能ならS構造においてA'-指定部に移動してはならないことを主張した。この方向性が正しいとすると、当然A-移動現象も同様に扱われるべきであると思うが、そう結論づけるには言語事実の詳細な検討が必要であり、この論文ではこれ以上立ち入れない。最近の極小主義の枠組みでの日本語のA-移動に関してはMiyagawa (1993), Tada (1992), Ura (1994)などを参照。

References

- Aoyagi, H. and Ishii T. (1993) "On NPI Licensing in Japanese," paper presented at the 4th Japanese/Korean Linguistics Conference, (to appear in the proceedings volume)
Brame, M. (1977) Base Generated Syntax, Noit Amrofer, Seattle, Wash.
Brame, M. (1978) Essays toward Realistic Syntax. Noit Amrofer, Seattle, Wash..
Chomsky, N. (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," in R. Freidin, ed., Principles and Parameters in Comparative Grammar, MIT Press, Cambridge, Mass.

- Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in K. Hale and S. J. Keyser, eds., The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
Chomsky, N. and H. Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters, in J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann, eds., Syntax: An International Handbook of Contemporary Research, Walter de Gruyter, Berlin.
Culicover, P. (1991) "Topicalization, Inversion, and Complementizers in English," in D. Delfito, et. al., eds., Fifth Symposium on Comparative Grammar.
Epstein, S. (1992) "Derivational Constraints on A'-Chain Formation," Linguistic Inquiry 23.2, 235-259.
Fukui, N. (1993) "Parameters and Optionality," Linguistic Inquiry 24.3, 399-20.
Harada, K. (1972) "Constraints on WH-Q Binding," Studies in Descriptive and Applied Linguistics 5, 180-206.
Hasegawa, N. (1981) A Lexical Interpretive Theory with Emphasis on the Role of Subject, Ph.D. dissertation, University of Washington.
Hasegawa, N. (1985) "Negative Polarity Items and S-Structure Conditions on Quantificational Expressions," ms., University of Massachusetts.
Hasegawa, N. (1990) "Affirmative Polarity Items and Negation in Japanese," in C. Georgopoulos and R. Ishihara, eds., Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in Honor of S.-Y. Kuroda, Kluwer, Dordrecht.
Kato, Y. (1985) Negative Sentences in Japanese, Sophia Linguistica 19, Sophia University, Tokyo.
Kato, Y. (1988) "否定の作用域と文法表示," Bulletin of the Faculty of Foreign Studies 23, 63-87, Sophia University, Tokyo.
Kato, Y. (1991) "Negative Polarity in Japanese and the Levels of Representation," The Tsuda Review, 36, 151-179, Tsuda College, Tokyo.
Kuroda, S.-Y. (1965) Generative Grammatical Studies in the Japanese Language, Ph.D. dissertation, MIT.
Kuroda, S.-Y. (1969, 1970) "Remarks on the Notion of Subject with Reference to Words like *also*, *even*, or *only*, Illustrating Certain Manners in which Formal Semantics are Employed as Auxiliary Devices in Linguistic Description; part 1 and 2," Annual Bulletin 3 and 4, Logopedics and Phoniatrics Research Institute, University of Tokyo.
Maki, H. (1994) "Interaction of Negative Polarity Items and Wh-Phrases: an Argument for the Linear Crossing Constraint," ms. University of Connecticut.
McGloin, N. (1976) "Negation," in M. Shibatani ed., Japanese Generative Grammar, Syntax and Semantics 5, Academic Press, New York.
Miyagawa, S. (1989) Structure and Case Marking in Japanese, Syntax and Semantics 22, Academic Press, New York.
Miyagawa, S. (1993) "LF Case-checking and Minimal Link Condition," MIT Working

Papers in Linguistics 19.

- Muraki, M. (1978) "The *sika-nai* Construction and Predicate Restructuring," in H. Hinds and I. Howard, eds., Problems in Japanese Syntax and Semantics, Kaitakusha, Tokyo.
- Pollock, J.-Y. (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," Linguistic Inquiry 20, 365-424.
- Rizzi, L. (1990) Relativized Minimality, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Saito, M. (1985) Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications, Ph.D. dissertation, MIT.
- Saito, M. (1992) "Long Distance Scrambling in Japanese," Journal of East Asian Linguistics 1.1, 69-118.
- Tada, H. (1992) "Nominative Objects in Japanese," Journal of Japanese Linguistics 14, 91-108.
- Takahashi, D. (1990) "Negative Polarity, Phrase Structure, and the ECP," English Linguistics 9, 129-146.
- Takahashi, D. (1993) "Movement of Wh-Phrases in Japanese," Natural Language and Linguistic Theory 11.4, 655-678.
- Tanaka, H. (1993) "Invisible Movement in *sika-nai* and Linear Crossing Constraint," ms., Dokkyo University.
- Tanaka, H. (1994) "Linear Crossing Constraint as an S-Structure Condition," ms., McGill University.
- Ura, H. (1994) "Varieties of Raising and their Implications in the Theory of Case and Agreement," ms., MIT.